

これでいいのだろうか その二

高橋 務

筆者は、本誌、第21号(1997年1月)に「これでいいのだろうか—小さな町の植物保護で考えたこと—」という小文を寄稿した。

私の居住する町内に、建設用の土砂採取用地の買収が進行しているという新聞折り込み広告から端を発して、買収予定地近くにあるフタバアオイ自生地保護のために、町議会に「田上町の自然の保全に関する請願書」を提出したいきさつについて記した。

初めて環境保護の運動を行ってみて、周辺の開発工事や自然環境の情報不足、将来的展望が甘く、総合的視点のないまま作られた公共施設、環境アセスメントがなく作られたら、という工事などについての疑問を述べたのである。

建設用土砂採取用地を買収するという計画は、その後どうなったか分からないが、当該地の土砂採取工事は、行われなかった。

そのことは、土砂採取用地の買収計画についての新聞折り込み広告が出た頃から、土砂採取予定地の下流地元民が、「水とみどりを守る会」を設立し、地域の環境調査観察会、講演会などを開いて、工事反対の動きをし、町議会で工事反対の発言があったことによるのであろう。

筆者らは、新潟県稀産のフタバアオイが、田上町に自生することが見つかったことと(1994)、その自生地の近くで土砂採取用地買収計画があることを知って、「土砂採取の計画を見直して自然環境保全を行うよう関係機関に意見書を提出して頂きたい」と請願した。請願書は、全会一致で採択された(1996)。



写真1：自生地でのフタバアオイ—1994. 5. 4
田上町で見つかった自生地の生育状態。

請願が採択されたことは喜んだが、自然環境保全の請願にもりこんだ保全すべき自然について、知って採択したのであろうかという疑問があり、物足りなさを感じた。というのは、「新潟県内の貴重な植物の生育地が近くにある」としたが、具体的な植物名を記さなかった。貴重な植物を保護するために自然を保全するとなれば、当然、その植物についての詳細を知る必要があるし、その生育地の確認も必要になるはずであるが、何ら照会も確認もなかったからである。

新たな土砂採取工事は実施されなかったが、隣接するところで始まっていた林道工事は進行していた。

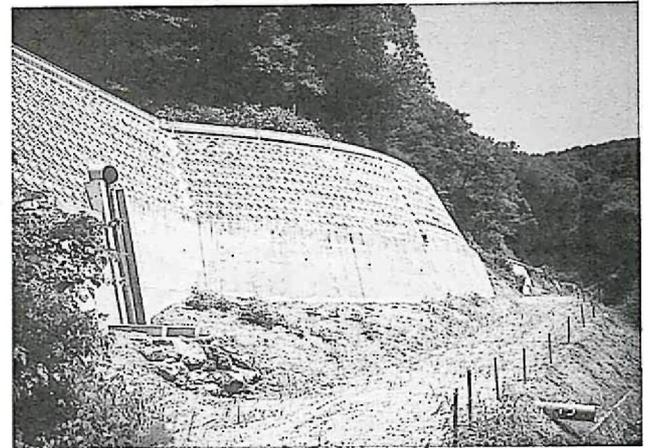


写真2：工事中の林道—1998. 7. 19
ダム本体より上流部の林道側壁、前方約100mの溪側にフタバアオイ自生地があった。

既存の沢沿いの林道とは別に山腹を削って建設される林道は、道幅が広く、ガードレールの付いた立派なもので、てっきり土砂採取と関連するものと思っていたら、全く別のもので、小さな沢に作られる洪水防止用ダム工事のためのものであった。

自然環境保全の請願は、土砂採取用地の買収計画、林道工事、洪水防止用ダム建設などの関連がわからないまま提出したので、土砂採取工事の見直しのみと受け取られて、請願書を採択する時点には、すでに土砂採取工事は、実施されないことが決まっていた、貴重植物を保護するということには関心はなくなっていたということかもしれない。

新潟県稀少のフタバアオイ自生地保護が第一義的であれば、別途計画され、始まっていた林道工事を洪水防止用ダム建設のための必要最小限に工事縮小して、フタバアオイ

自生地の保全も可能であったであろうが、すでに後の祭りとなってしまった。

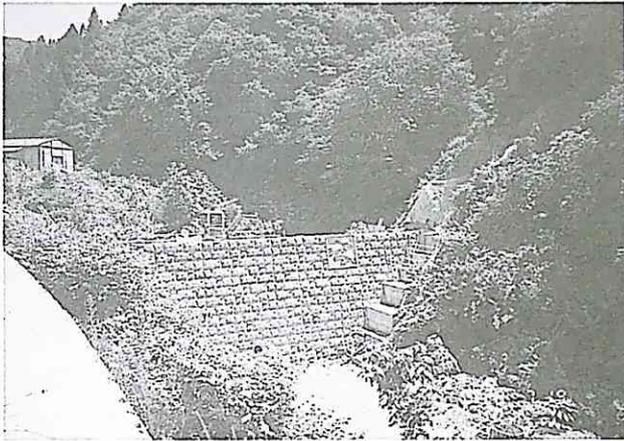


写真3：工事中の洪水防止用ダム—1998. 7. 19

山腹を削って造られる林道の工事の進行をみていると、沢沿いの窪地のフタバアオイ自生地に影響が及ぶことが予想されたので、緊急避難的に、自宅の庭に移植した。

林道が使えるようになると、ダムの建設工事がおこなわれ、小さい沢に大きな洪水防止用のダムが出現した。

結局、フタバアオイの自生地は、林道工事によって潰されてしまった(1999)。

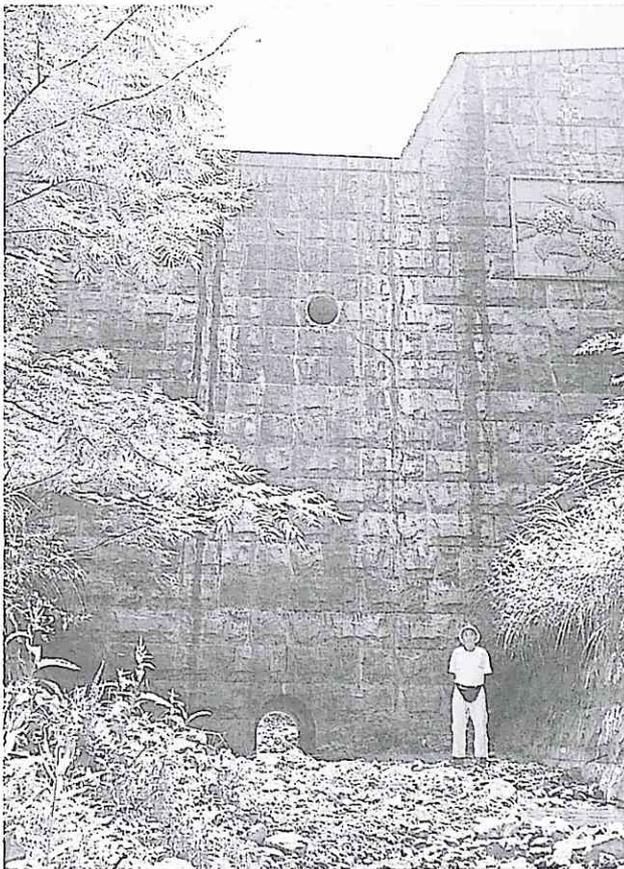


写真4：完成した洪水防止用ダム—2004. 8. 20
平常時の水流は足元にみられる

自宅庭に移植したフタバアオイは、順調に生育し個体数も増えた、しかし、なにぶんにも狭い庭で育て続けるのは困難だし、一箇所で栽培していて突然消滅してしまう危険もあるので、まず、植物仲間に栽培を依頼し、増殖したものを、次のように措置した。

- 1) 植物好きの人に栽培を依頼。
- 2) 田上町の公共の公園・施設内に移植。
- 3) 自生地があった所に近くで人目につかない場所に移植。

フタバアオイの田上町の自生地を失ってしまったが、田上町産のフタバアオイは、移植によって保存されている。

公民館活動「野草観察」に参加する広い屋敷のある人に、フタバアオイは、徳川家や加茂青海神社の紋所であり、新潟県では稀少の田上町産の大事な植物ということを説明して移植を依頼すると、快く引き受けてくれた。

町所有の観光施設「豪農の館・椿寿荘」は、庭は広く、管理人が居るので、植え込みの中にフタバアオイを保存するには適切と思い、管理者に事情を説明して移植した。

鳶が沢森林公園に2箇所、総合公園(ゆうゆうランド)1箇所、人目につかない自然状態の場所に移植した。移植後の生育状態は、定着し、周囲に種子から育ったと思われる小さい個体が見られた(2004)。フタバアオイは、地上をほう茎から根を出して増殖するが、個体数の増加や生育場所の広がりには遅く、種子から生じたものも数は少なかった。今後、順調に個体数を増し、自生地にあったように密生状態になるには、まだ長い年数がかかるようである。

自生地の近い場所での移植先は、もとの自生地が洪水防止用ダムより上流部にあったので、移植する場所を水没のおそれのないダム下流部にした、ところがその場所での生育状態は、かろうじて生きているという状況で、生育場所として適さないのではないかと考えられ、別な再移植地を探さなければならないと考えている。

これまでの経過のなかで、反省すべき点があり、課題があった。

第一に、一住民のできることとしての保存すべき植物の自然環境保全の請願には、保全しなければならない自然とその自然を改変する工事をあげたが、具体的にあげた一つの対象工事が消えると、第一義的な自然の保全も消えてしまい、別の工事で、保存すべき植物は失われてしまった。

自然環境保全の最も重要な目的の据えかた、方法などに工夫が必要であった。

第二に、自生地を失ったフタバアオイを保存するために移植した。

個人の家の庭や公共の施設の庭園に移植したものは、受け入れてくれた人は、その出所を知っていても、何時かは

わからなくなってしまうであろう。

公園の自然状態のところや元の自生地近くに移植したものは、定着したようであるが、生き続け、個体数を増し、群生するようになるだろうかと不安がある。

いずれにしても、新潟県のフタバアオイ自生地の一つを保全できなかったこと、悔いがのこる。

田上町産のフタバアオイを保存のため移植したこと、これでよかったのだろうかと思ひながら、今後の推移を見守っていきたい。

(2004年11月10日 記)

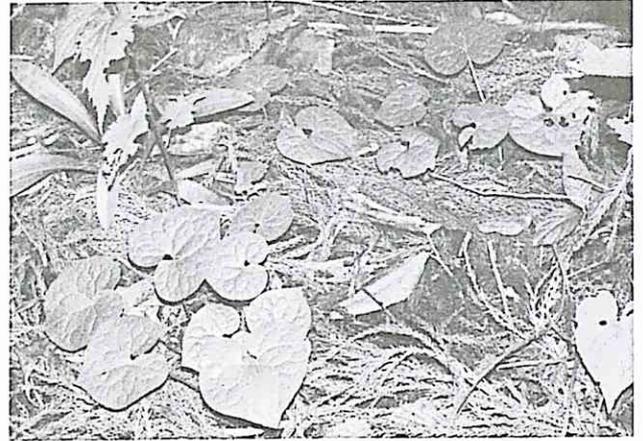


写真5：移植したフタバアオイ—2004. 8. 20
スギ林の中、移植5年目の生育状態

絶滅寸前のオオユリワサビ

白 崎 仁

オオユリワサビは、栽培されるワサビに似ているが、地下茎の上部にユリ根のような4～5枚の鱗茎葉がついているものである。ワサビは水の豊富な場所に生育するが、オオユリワサビは、水辺より離れたやや乾燥しがちの場所に生育する。絶滅危惧種の一つで（環境庁自然保護局野生生物課2000、鳴橋ほか、2000）、新潟県では、南西部の青海町と北部の弥彦村、および佐渡にわずかに分布する。そのうちの弥彦村のものは古くから知られていたが、保護の観点から、生育地が明示されず、ほとんど全滅したとされている（伊藤1981）。そこは、弥彦村東側山麓にある、弥彦神社の南側の駐車場沿いのスギ林の下に、5m×5mくらいの範囲に数十株が生育するだけであった。20年ほど前に駐車場が林の境界まで拡張されて、生育場所が狭くなり、消滅の危険が迫っていた。今年の7月にこの生育地を訪れたところ、川に沿って弥彦山の山麓ロープウェイの乗り場付近まで、スギ林が伐採されて、幅3mほどの道路が開かれていた（写真1）。オオユリワサビの生育地は、この立入禁止の札の右側にあたるが、大部分の生育地が碎石で埋められて（写真2）、鉄パイプの囲いの外側では、広くゴミを燃やした跡があって、前より日当たりが良くなり、イヌタデやノブキが生育するだけになった（写真3）。オ

オオユリワサビの生活史は、春に開花結実した後に地上部が枯れて、夏季には地下茎上部に鱗茎葉がついた状態で残り、秋に再び葉を展開するので、7月ではその存在がわからない。この時は消滅したと思ったが、確証がないので結論は秋まで待つことにした。11月7日に、同地を訪れ、その場所を探すと、1個体だけが葉を展開していた（写真4）。道路工事は神社の事情によるが、工事が終わってから「知らなかった」「消滅した」では、もはや手遅れである。所有者の権利は優先されるが、国定公園内の公共性の高い場所については、管理者は、自然環境保全の意識をもっと高めてほしい。このまま保護されなければ、1個体では、もはや回復は困難で、消滅を待つだけである。オオユリワサビが、佐渡のトキと同じにならないように願っている。

引用文献

伊藤 至 (1981) 新潟県弥彦の植物. 188pp. 新潟県西蒲原郡弥彦村.

環境庁自然保護局野生生物課 (編) (2000) 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—. 8植物I (維管束植物), 660pp. (財) 自然環境研究センター、東京.